

シンポジウム③ 「子育てにおける中医学」

座長：渡邊善一郎（富士ニコニコクリニック 院長）
加島雅之（熊本赤十字病院内科）

「成長発達中の小児疾患には中医学を」
渡邊善一郎（富士ニコニコクリニック 院長）

「子育ての韓医学 小児の成長発達と伝統医学」
金 英信（韓国嘉泉大学校韓医科大学小児科 教授）

「小児神経症の鍼灸治療」
郭 珍（郭中医鍼灸院 院長）

成長発達中の小児疾患には中医学を

The childhood disease under growth development is cured by traditional Chinese medical science.

渡邊善一郎

富士ニコニコクリニック

Zenichirou Watanabe

Fuji nikoniko Clinic

【緒言】 シンポジウムのテーマは「子育てにおける中医学」であり、子育てとは母子ともに安心して健康に成長することである。病気に関わる医療者として、今回は成長発達中の小児疾患に中医学（漢方治療）がどのように有効かを検討してみた。当日は症例を提示しながら発表する。

【結論】

- ①小児急性疾患（急病）の特徴は、病邪に対する抵抗力が未熟なため、弱い単純な病邪にも罹り易く、激しい症状（高熱）を呈することである。軽症時期から母親に助けをもらう早期警告システムで対応しているため、治り易い反面、臓腑が未熟であるため急速に重症化し易い。現在の日本では小児科医数はやや増加しているが、地方の小児科勤務医は不足し疲弊している。そのため夜間休日患者の集約・選別が必要になり、小児救急医療が整備されている。富士東部小児初期救急センターでの急病患者は大多数が軽症ウイルス感染症であるため、演者は90%以上を漢方エキス製剤のみで対応している。
- ②慢性疾患（久病）のアレルギー疾患は増加傾向である。その一因は疾病予防や清潔・無菌社会を優先した結果、過保護に育てられた小児のなかには成長しても早期警報システムが残存し、過剰反応としてアレルギー症状が生じるためと考える。西洋医学で提唱しているアレルギーマーチ（乳児湿疹→喘息→花粉症）は中医学では皆、同じ病に属するが、それらに対しては臓腑が育つのを待つ治療を行っている。
- ③小児は自然や社会の環境変化に強く影響を受ける。現在の日本社会は冷房・冷蔵庫の普及により古典とは異なる「小児冷え症」が増加しているため、古典からの概念を参考にして、その時代に適合した治療が必要になっている。またストレス社会の日本では精神疾患・社会適応障害の小児も増加しており、西洋医学の治療に難渋している小児に対しても心身一如の概念をもつ中医学の治療を行っている。

【まとめ】 日本では医療保険制度により安価で小児科専門医の診察を受けられ、親は安心して育児することができる。現在日本では漢方エキス剤150種程度が医療保険に認められ、小児科医は漢方エキス剤を多く使用している。演者は中医学理論より漢方エキス剤を組み合わせることで大半の小児疾患の治療に応用できると考えている。しかし難治・重症例に対しては煎じ薬を用いている。急病では急変や脱水症の存在を常に注意しながら、早期・大量・頻回の大胆な投薬を行い、久病では患児の生活環境の変化に考慮しながら、成長を邪魔しないで、育つのを待つ適度の治療を行う。小児治療では患児の努力・保護者の協力・医療者の知恵の三位一体が原則である。

子育ての韓医学 小児の成長発達と伝統医学

Child-care by Korean Medicine

Growth and the development of the child with Traditional medicine

金 英信

韓国嘉泉大学校韓医科大学小児科

KIM youngsin

Pediatrics, Gachon University College of Korean medicine, KOREA

伝統医学である韓医学は西洋医学が入ってくる前には国家の主幹医学であった。韓医学が主幹医学であった当時、小児科は今の西洋医学と同じようにメジャーな科に属していた。しかし西洋医学の導入と抗生物質、消炎剤、予防接種等の登場とともにその領域は非常に狭くなりマイナー的な存在になってきている。しかし、医学のすべての分野で同じ事がいえるように小児科領域でも西洋医学は疾病だけが対象であり人間という個体に対する概念がない。特に小児においては体重、身長、免疫抵抗力、治癒能力などに代表される成長発育能力欠如の状態に対して疾病として分類されなければ対処の方法がないのが現実である。伝統医学である韓方医学は病気の治療においてその疾病を治療することにより体の状態を改善して、抵抗力の向上、体力の向上を同時にはかることができ、その結果、同じ疾患にかかりにくい抵抗力のある正常な身体状態を作り上げることができる。韓医学の任務は疾患の治療だけに止まるものではない。出生以後思春期が終わるまで韓医学とお付き合いすることで子供の健康管理に多大な影響力を与えることができる。韓医学では子供の虚弱症を5つの類型に分類して、予め子供の虚弱を探し出しその虚弱状態を改善することにより成長不十分、虚弱体質、低身長などを防止することができ、それらは結果的に疾患を予防し、発病しても重症にはならず、病の早期治癒の道につながることになる。韓国では出生後、健康な子供は1歳から年に1回、年の数に合わせて鹿の角が入った韓方薬を服用させる習慣がある。子供の状態によっては出生6カ月から服用させることや年に2回以上服用させることもある。伝統医学的治療の難点に韓方薬というシロモノを飲ませなければならぬという事がある。場合によっては鍼も打つ必要がある。子供の韓方は子供だけ相手にすればいいものではない。子供が幼い時は母親の年も若いことが一般的だ。幼い子、赤ん坊と対話ができない難しさに加えて、伝統医学的治療に無知なお母さんを教育する必要がある。薬を飲ませられない親。鍼を打っても子供はじっとしているのにお母さんが騒いだりその逆もある。このようなことをふまえて、成長発育、急性扁桃腺炎との関係を例に韓方治療の優秀性を語りたいと思う。

小児神経症の鍼灸治療

郭 珍

郭中医鍼灸院

少子高齢化が進む社会において、核家族化などの家庭環境の変化や育児における様々な問題などが原因となって、子供の心理的要因による様々な身体的、精神的症状が起こる。その中の一つである小児神経症に対して西洋医学では有効な治療法が確立されていないが、東洋医学のなかでもとりわけ鍼灸が有効であり、WHO（世界保健機構）も、小児神経症に鍼灸が適応であることを認めている。

【小児神経症について】小児神経症とは、心理的原因によって起こる身体的、精神的症候群をいう。また器質的障害を伴わない。環境的ストレスによることが多い。特に、育児の仕方は最も関係しているといわれている。主な症状は、睡眠障害、不安、恐怖、チック、食欲不振、夜尿、頭痛、腹痛などがみられる。

【東洋医学の見解】東洋医学では、小児神経症に該当するものの代表として、驚、癇、疳があげられる。驚は小児驚ともいう。心神が定まらず、驚を発する。驚風（小児のひきつけ）、驚啼（睡眠中に驚いて泣く）がある。癇は驚より重い病態としている。顔面が青ざめたり、目をひきつけたり、甚だしいときは失神する。小児神経症は古来の驚、癇より軽度な病態と思われる。疳は疳疾、疳積、疳証という。小児の授乳、離乳食を与える方法が悪く、胃腸障害をきたす病証である。また、江戸時代から疳の虫、疳虫と呼ばれている症状（夜泣き、夜驚、落ち着きがない、イライラ、奇声を発する、食欲不振など）は小児神経症に該当するものと思われる。

【鍼灸治療について】**診断：**小児に対して、四診（望、聞、問、切）を用いて、特に3歳以下の小児に小児指紋をみる。また、小児神経症と思われる患者には、顔色が青白い、眉間や鼻根部に青筋（静脈怒張）が見える、髪の毛が逆立っている、表情が陰しい、白目の部分が青っぽいなどの特有の症状がみられる。**治療：**①中医鍼灸：中医学弁証に基づいて、主に心、肝、脾、胃の失調を調理する。小児に対しても基本、大人と同様に毫鍼を使用するが、一般的には細い鍼で浅刺し置鍼はしない。刺絡、耳穴なども併用することがある。治療に協力できる年齢の小児にはお灸を行う。②小児鍼：江戸時代から行われるようになった日本独自の療法であり、特に乳幼児に用いる鍼をいう。普通の毫鍼を刺入する刺鍼法と異なって軽度の皮膚刺激を主とした鍼法である。摩擦鍼類、接触鍼類、切皮鍼類などに分類され、代表的なものとして集毛鍼、ローラー鍼、いちよう鍼、てい鍼などがある。皮膚に突き当たるような刺激を与えるもの、皮膚を摩擦、擦過の刺激を与えるもの、皮膚の表面をわずかに切る刺激を与えるものなどに分かれる。小児鍼は痛みをほとんど感じないので、治療には便利かつ有効である。小児鍼の治療は、特定の穴位に対する刺激というよりは、全身皮膚の接触刺激が主である。③小児推拿（捏脊法）：食欲不振、腹痛、便秘、睡眠障害、夜泣き、驚悸に適用する。主に、脊椎（督脈）と背俞穴を中心に刺激する小児推拿の特殊な方法である。具体的に小児鍼灸治療の例を紹介する。